

専門家としての教師——齋藤喜博氏の提起する問題に関連して——

佐々木 享

—

「わたくしは、『教師は専門家だ』という言葉は、そんなに簡単には出していません。それぞれの分野での専門の力を十分に持った上で、授業者としての専門の力を持つということをしている。」（『一つの教師論』五八ページ）

「島小では、この十一年間、授業によって教育の可能性をぎりぎりに追いつめ追求をし続けてきた。その結果は、教育の可能性の目標はつきつきと高いものになり、はじめ三十だと思っていたものは五十になり、五十だと思っていたものは百になっていった。……そして、百より先に、どれだけの可能性があるのかわからないと思うだけである。」

わたくしたちの実践が、五十になり七十になったときは、いま百みえているものが、百五十になり二百になるのではないかと思うだけである。

わたくしは、そういう仕事によって自分たちを専門家にし、専門家による専門的な仕事をつくり出さなければならぬと考えてきた。（もちろんわたくしも、政治経済その他の分野での、専門家の追求の不足を感じている。それが教育に直接強くひびいていることも感じている。けれどもそれは、教育という専門の場以外のところで、それらへの要求はすべきである。）専門家としての教師は、どこまでも自分の仕事での、無限の可能性をぎりぎりのところまで追求していくべきである。そう考えて実践した結果、教師が

専門的な仕事をすることによって、現状でもまだまだ、教育の可能性は無限にひらかれていくと考えているわけである。

わたくしはそう考えるのだが、いままでの教師の世界では、自分へ矢を向け、自分の仕事で追求し、自分を専門家にし、教育の分野での可能性に向かって、ぎりぎりまで追求し実現することへの志向と努力の不足があった。教師が自分の専門での追求をせず、(いたずらに政治・経済のみを論じたり)へんな一般論のみやったり、皮相なムード的な危機感や絶望感のみを持つたりして、専門の自分の仕事への貧欲なほどの執着とか執念とか追求とかがなかった。それによって突破口を見出すというようなことがなかった。したがって教師は、何を専門にしているのかわからないような人種になり、ぬし的な存在になり、専門家としての重さも、迫力も、自信も、発言力も持たないものになっていった。

もともとと専門家の仕事は、誰にでもできるなどというものではない。」(『私の教師論』一四一―一五ページ)

これは斎藤喜博氏の文章である。結論をさきに行くと、わたくしは、教師は「無限の可能性をぎりぎりのところまで追求していく」ことのできる専門的な仕事をもってしているし、だからその仕事の専門家たりうる可能性をもっている

と考えている。そして今日の多くの教師には専門家になろうとする「努力の不足」があることを認めなければならぬと思う。この意味で、わたくしは斎藤氏の発言におおむね賛同できる。鳥小についても斎藤氏についても今まではほとんど何も知らなかったわたくしは、この原稿を書くために、この正月元日から氏の著作にできるだけ目を通そうと努力し、今までに『学校づくりの記』『授業入門』『表現と人生』『授業』『私の教師論』『一つの教師論』『現代教育批判』『教育現場ノート』だけを読んだ。これらに関する限り、わたくしは、授業のあるいは教育の可能性をぎりぎりまで問いつめようとする斎藤氏の情熱に感動しながら読んだ。

ただ、さきに引用した部分のうち、()を入れたのはわたくしだが、()のなかのことばには、賛成できない。なぜなら、「いたずらに政治・経済のみを論じたり」する教師にはたしかにおそらくは専門家とはいえないような教師がいるのは事実だが、それにもかかわらず、いまの日本には、政治・経済のことを考えたり論じたりする教師があまりに少なすぎるという点からみて、このように批評することには賛成できない。同じような意味で「政治活動もやり授業もやるというように両方などできない」ということである。両方などやっていただけでは、どちらも何も出す

ことはできない」(『教育』六六年十一月号、一〇四ページ)という発言にも賛成できない。この『教育』誌からの引用は、もっと前から引用しなければ誤解されるおそれがあるのだが、あえていえば、教師にとって授業は「実践の中核である」ことを確認したうえで、なおかつ賛同できない。すぐれた授業の実践家であり、かつすぐれた政治活動の実践家であることはたしかにむずかしい。しかし、一方に努力するだけでもたいへんなことからといって、両方を追求するのを批難する必要はないと思う。

二

『広辞苑』では、「専門家」とは、「或学科」または、「或事項を専ら研究または担任する人」であるとされている。「または担任する人」というのが気にかかる。この解釈によると専ら教育というしごとに従事している教師はみな専門家であることになる。わたくしには、「或事項を専ら研究し担任する人」を専門家というのではないかと思われる。現実にデモ先生やシカ先生がいるのに、教師を職業としている人がそれだけの理由で専門家だとみなされたのは、専門家などということばは不要になってしまふからだ。

今日の教師は、専ら教育をそのしごととしているという

点からみて、専門家たりうる可能性をもっているというべきであって、研究し追求することを怠るならば専門家たりえないのではないか。前掲の文章のなかで斎藤氏も同じ意味のことをいっている。

教員免許状も、それを所持すること自体が専門家の要件とみなされるほどに価値のあることは望ましいにちがいないが、現実はそのような状態とはほど遠い。教員免許状は、教育の専門家になりうる可能性をもっていることの証拠物件の一つにすぎない。

ところで、教師が教育の専門家として力量を発揮することができるのは、何よりも授業である。おどろくことに、このことを認めなかったり、軽視したりする教師がいる。子どもたちに新しい知識を教えることくらい、大学を出たくらいの教師なら誰にだってできると思っているのである。そして、誰にもできるし、誰もがやっていることだから、授業などというものは努力して研究するに値しないしごとだと思っている人が多いのである。

教師のしごとのなかで授業のもつ重みを認められない教師には、もともと教師は専門家たりうるのだという自覚がないであろう。そうだとすると、一般の社会人が、教師を専門家として認めず、専門家として遇しようとするのは当然だということになる。

「実践によって、子どもの豊かな可能性をひき出し、テスト主義教育（動評や学力テストや、『期待される人間像』教科書統制などをふくめて）が、いかに人間を押しつぶし、矮小化するかを、はっきりと実証してみせなければならぬ。そのためにいまは、早急につきぎの三つの作業を進めなければならない。

その一つは、専門研究者・芸術家などの、専門的な力による教科教材の研究と体系化である。一つ一つの教材の持っている本質とか方向とかを明らかにしたり、教材内容の整理をしたり、単純化したりするとともに、教材の系列化・体系化をはかることである。……

二番目の問題は、教授学および授業展開の一般法則をつくり出すことである。教授学および授業展開の一般法則は、授業展開の原則なり法則なりを示すものであり、授業展開の道しるべとなるものである。しかし、日本では、このどちらもつくり出されていない。……

三番目のしごとが、現場の教師のやる具体的な授業展開である。教師は自分の専門のしごとである授業というしごとをおして、具体的な子どもをつくり出し今の日本の現実のなかでの教師の任務を果たすわけである。」（『現代教

育批判』一一六一—一二二ページ）

ここに引用した文章はよく読んでみれば、「教科教材の研究と体系化」という課題にしても、「教授学および授業展開の一般法則をつくり出すこと」にしても、今の日本では現実にはなしとげられてはいないのだから、そういう状況のなかで専門家として授業をしなければならぬ教師の背には、比重の軽重があるにせよ、三つの課題が負わされて、ということになる。教師が、今の日本で少しでもまともな授業をしようと思うならばたいへんな努力が必要なのだ。

「もともと専門家のしごとは」たいへんな努力を重ねることが必要だからこそ「誰にでもできるなどというものではない」のだ。たいした努力もなしに、多少の経験さえつめばうまくなるというのなら、それは専門家のしごとではなく、自動車の運転や平凡なサラリーマンのしごとと同じようなものにすぎない。たしかに、「教師のしごとは、いままでの限りでは誰にでもできるようなものが多かった。」（『私の教師論』一五ページ）しかも、あまりにも多かった。深く研究し、実践し、何回となく打ちのめされる苦労を重ねることによってしか、専門家としての道が開けてこないのは、教師に限ったことではない。常識で授業をする人には、常識的な授業しかできない。

一つの例をあげると、今日の多くの教師は、学習指導要領や検定教科書などに盛られた既成の教材の真偽や体系を、一度はうたがってみるといふことをしない。正直だといえはそうもいえるが、いっさいの既成のものをばらばらにし、苦勞をして自分の授業の血肉になるように組みなおすという努力をしようとするしない。

授業の展開にしてもそうだ。教材自身のもつ法則性に無関心だから、さまざまな教材の特徴とは無関係に、授業のかたちを既成の概念に従ってととのえようとする。

そういう授業をしている教師には、教材のもつ深みやその教材による学習の発展のより大きな可能性はみえない。授業のもつ「無限の可能性」をみいだすことができない。そんな授業しかないから、教師という職業をみずから卑下することにもなる。

四

授業をするというしごとには、かけがえのない重大な重みがあり、そこには追求すべき無限の課題があることを正當に評価できない教師は、その反面で、授業でなしうることには限界があることを知らないから、授業に対して過大の要求と期待を出すということも起こってくる。

たとえば、わたくしの関係する分野では、しばしば「創

造性を養う××科教育」という題目をつけた授業実践の報告書がみられる。わたくしはこういう報告書をみるたびに、この報告者は、一つの教科の限られた時間の授業のなかで、「創造性を養う」ことができるかとほんとうに考えているのだろうかと疑ってみる。ところが、今まで教師の側から、こういう疑問が提出されたことはほとんどない。それどころか、疑問を提出するわたくしに対して、「創造性」をめざすことを否定しているといつて批難をあびせてくる。

先日も「授業」をテーマとしたある研究会で、こういうことがあった。ひとりの国語教育の研究者が、「国語の授業のなかで、戦争をきらいになることを教えることはできない」という意味のことを発言したら、ひとりのたいへんまじめそうな婦人教師が、「でも、わたくしたちは戦争をきらいになる子どもを育てなければいけないのではないですか」と食いつがってきた。その研究者は「わたくしは徳目を教えようとする文部省の道徳教育に反対すると同様にわたくしたちは国語科教育を民主主義道徳の場にしてはいけないのだ」としかいわなかった。ほかの教師からは賛成の声も反対も出なかった。その婦人教師は不満のようだったのでわたくしはあとで残って少し話し合った。わたくしはつぎのようなことをいった。「教育基本法(第二条)

にもあるように、教育はあらゆる機会にあらゆる場所において行なわれるべきものだ。そのなかで占める学校教育の位置はひじょうに重要だが部分にすぎない。この研究会で討議している授業というものは学校教育のなかでおそらく最も重要な問題であろうが、学校教育は授業がすべてだとは誰もがいっていない。わたくしたちは、戦争をきらう子どもを育てたいと思うが、それは教育全体のしごとではないだろうか。わたくしは国語教育の研究者ではないから詳しくはいえないが、文章を正確に読みとり、文章にかかれたことがらが真実を表わしているかどうかというようなことを判断できるような力量をつけてあげるのは国語科の授業でなしうることの一つであろう。そういう力量が、戦争に反対するような子どもをつくりあげるのではないだろうか。授業でできることには限界があるが、そのなかでできることをわたくしたちはまだまだやっていけないのではないか。

わたくしは、かんたんな説明や話し合いでその教師が「授業の限界」についてわかったなどとは思わないが、はじめそうなる人だから考えてくれるにちがいないと思うことはできた。そのことよりも、国語教育研究者の投げかけた問題について他の教師からなんらの反応もなかったことのほうが気にかかった。それはちょっと聞けばすぐわかるよ

うな簡単な問題ではなく、ひとりひとりの教師の実践にぬきさしならないほど深くかわる問題であるはずだから。専門家といわれるほどの人は、専門とする自分のしごとのもつ発展の可能性を確信して、それを深く追求する。他方、専門家は、自分の専門とするしごとのなしうる限界というものをひじょうにきびしく自覚している。自分のしごとの限界を知るものが専門家だといってもよい。これは、専門家というメダルの両面である。

斎藤喜博氏は、教師のしごとのもつ限界をすどく自覚している。氏はしばしばこのことを、教育は、「きびしいはかないしごとである」と表現している。

五

教師が教育の専門家になろうとするには、自分にへばりついている古いから俗物根性とたたかわなくてはならない。かたちをととのえることによってとりすまそうとする形式主義、欠陥を指摘されることをおそれて自分のからにと同じこもること、新鮮なもの、すばらしいもの、等々に對する不感症、自分の欠陥を指摘されないために他人に對しても表面だつて批判しないこと、はためには勉強しているようにみせるどりつくり、校長や役人にはよく思われようというへつらい、心身が疲れるような努力を回避する怠

権等々、自己とのたたかいたしには専門家は生まれない。

齋藤喜博氏は、みずから歌をよむくらいの芸術家肌の人だ。そのせいかもしれないが、教師のうちにひそむ俗物根性とのたたかいたしを実に鋭くついている。

以上のべたことに関連する気がかりなことを一つだけ付け加えておきたい。専門家というものはえてして、みずからのしごとには練達になるが、自分のしごと、自分の位置づけをふくむ政治について鈍感になりやすい。専門家といえるような教師があまりに少ないというときに、こんなことを書くのは欲ばりだとは思いますが、心しておきたいと思う。わたくしたちは、教師をして専門家たらしめまいとする政治が行なわれていることにも注目しなければならぬし、それとたたかうことも必要なことから。わたくしは、専門家たろうとする努力と政治の観点にたつたたかうことを二者択一の課題と理解することには反対する。教師が、みずからをひとりの労働者として位置づけて、みずからのしごと・生き方を今日のすべての労働者・農民・勤労者のおっている政治課題とむすびつけて理解することは、今日の日本においては、教師が専門家として力量を発揮するというしごとと同列に並べて論じうる問題ではない。それは、デモに参加するかしないかという一行動にワイ小化してはならない問題だと思ふ。このような問題については、齋藤

氏は、最近の『教育』に寄せた論稿のほかは、ほんの片言ずつふれておられるに過ぎないように思えるし、短い紙数では私見をのべることもできないので、別の機会をまつことにしたい。

△専修大学講師▽